



143



門
153
474
卷

東和遊記序
 史遷の志を述べて名山大川を擗ると文史に志
 ありては一志は河れとならば人の身取之に
 中ち智の要士の政費をば一といふともま
 うの事とが會て謝肇漸のあけよいなこと
 たりとて是れみくろよりとて記すはこと
 ありあるに中月いあが健たるとれい
 ありとも日記をよるとれい勝地の感ありとて
 ありとも一ふれい録にたるとれい取ありとて
 ありとも一ふれい録にたるとれい取ありとて
 ありとも一ふれい録にたるとれい取ありとて

微きことあらん世に希きことあるまじきこと
ト云ふに人のいふ此君子人死すめに
をさし自らうりたるはつたに其山川
乃百歳なるを死地に入れたるに
少くも命をたすむるに教養の
ふくむる乃其心もくもく
志すも志すもあはれに
いふ志すもくもく
ふくむる乃其心もくもく
の志もくもく

蔵此ふくむる流砂此難死に
と云ふ願いなりくもくもく
初て醫者乃術此極死をくもく
まはる後此はくもくもく
才此流砂なりくもくもく
門生此皆もくもくもく
此入るるはくもくもく
ふくむるはくもくもく
まはるなりくもくもく
ふくむるなりくもくもく

一 一足鳥 一 麝香嵐 一 青天

一 神樂 一 いらは

四の巻

一 篤實 一 仙人 一 孝行

一 流人 一 阿蘇山 一 仁斯至

五の巻

一 天の逆鋒 一 目録終 一 家緒

一 地獄 一 東海氏の墓 一 清正公

一 山汐 一 高僧の涙 一 景清の母

一 卓子 一 鐘乳穴

目録終

西遊記巻之七

檜垣女

毛裕子著

大羽突釘の美肥後國岩戸此鏡音は教審の中か或人於此の
事よりそふ百羅漢と石とく彫刻て安坐を以てまゝなり
成終しそ終審此類をもあまをそと人々もつりしめ
やまくとつりしめあまをそと人々もつりしめ
よ入もそ繩をそ山の峯より釣り下りて幸ふしそ類は
りもそあつらふちりし一折ゆりしめ
しそつりしめつりしめつりしめつりしめ
人々集りてつりしめつりしめつりしめつりしめつりしめ
つりしめつりしめつりしめつりしめつりしめつりしめ

八活の字と書たり醫事と云ふも辨昧なと取たりハ活蟻と
書る右の羅人少と云ふはさしむるはさしむるの心くる目さ
ひのあらしうとまはは

櫻本北大地

肥後守赤松麻郡の河城下より所とらるる水知足軒といふ
小菴よりも菴の裏とまむるち赤松川なりま川端より大なる
坂本あり地より上二町有河の北二より成りくつらま
これ買うるは成りあつても中ふは又北大地をありけい
坂本のよりふゆくと城下の人々とあはれなり新とん谷
すまの痛む事ありとては本の北と通りののち願を生れ

馬琴
石巻地

色る者の事なり好くささ成て尺よりありあく懸着色白く長さ
ハ終りて尺餘なり生えハ犬の足のみきりて又草虫よ
よく知れりとも小水の者乞とま青坊地と云昔より人紙書
する事ハなるとて手と紙交ま櫻本北下より、まうのり
んくやちありくやほいよまう地

楮の符倉の大地

是と云う地は一前地事なり一赤麻乃城下より六里まか
り難とそ松の地念とりの水ありけ水の百姓或人山深く本
ころよ入りかま地とて赤麻相よりりて長さ八九尺と
りりなる大枕草の志がもる者よりまふとおて遊楽るの

色はくくともあつたさかか人ともはやくくくし本ある船力
 ちく合候くさう小船くはあふ大地と打撃ぬ赤の事
 予うお麻ふりうりくはくくさ年斗のほまもハ赤の打敷
 せくふにのりまう骨く朽ゆうま骨の候ととんろ骨れをい
 うやくてんんとお麻の赤州者右田助ちゆつ誘ひくくとと
 ちく地地腫く腐るぬく骨れくさうまとまうく是くく
 けちさの地地くは遠あくと老がらくくすく等家まあ
 色くぬは此と板本の地と回種れかうくくく地地
 とあくくのみみみ

地地腫地骨皆醫家の珍まする奇業たう予うくく是くく

小き真肉とんたうとくもゆきまハ獲骨ともはゆくくて右
 田ともく先くなり今あまんとくハ枯くやまといはてみる
 つゆまと波死のくこれくく先が死くくぐりふてそれ
 ふまなれて予とあまう珍奇のゆふととびぬくで業宗よ打
 くるくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

琵琶の妙子

此の琵琶は只平あゆ後とうくくにま聲の調子代りあす
 此の琵琶と自由又雅樂の琵琶とを較にらゆくくくくくく
 みのくなり律と糸のゆあまハまううちともソクくくくく
 二種あまくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

たり小亭とありて其つらき小橋をうらむる如きはとふ
 物あり人よ足すも不味自成語せり又藤原のありし時森
 中身流々々人の家に招くも種々馳走の上賓生とつらむ法
 師成すひい琵琶とせりせりを道又倫花の香小町玉章似我
 墨繪老曾の森。卷之十一の最。まるとりふうく致しくむらり先を
 うく此名と雅ありくま章とまう古先うくま音の記さうくと
 春の香の最の中は晴るうとく谷の清水の岩居ふびせり
 似たりまあうへまうみみの嵐は極ゆる松よ海るうとくま
 如くとあくはつる平家琵琶などあ似とよくは波白紫天
 う琵琶のりまそとひ合せり又岩とつかりのありまを薩

ありてひう。伊東大友とく合戦の事成渡る少くま勢とと
 ありて琵琶の事と勢なりなり先のうとくは極あり小島
 りりのまうとらうも是を新く致すゆらう先のうとくは極あり
 らうとくまて只ま致すはまままの口はれりまの平とま
 づあつたおひゆりくま致すと他人んと知りひいまは極お
 せりうとくまてすくおひゆりくとあは極を流るまうり
 をとくしぬけ極は雅具とせうとくて別小琵琶の事を極成作
 りて日記うあややり又波うくの章ととて書きてゆりぬの
 ぼりての世のまふあうん人の波琵琶の事と他人とよか
 しととあふのこ

ち船を楫をもちのりてゆく事とよくあつ居るゆゑなり
 とおとし終りしは船のりとも舟ともありの成り
 魚をぬきしを舟に形繪のこく概に長さ之間をきと終り
 作りてこつに日れ力へりててききき大種をり石ツキ此
 而又長き綱成付より船取は舟とほく事妙なりて海上
 浮るる魚と小きものとりてととぬくと突るきさのきと
 サスガととちなる魚に船おきさへは舟成投よりきと射る
 ようと懐よりり小と舟と物と船と小立居よりしりひか
 ぶの波も小悪くらんゆゑあると申ぐて件に舟成投けけを
 日よきき魚と躍るのこ色ゆく船取とる類は波編と

ち長くありしやる船ともあやとらきき魚に後ひ由記さ
 らくして静な船と舟がまらんき魚舟の力へりしとち
 らとては船と舟とあつある船舟の柄とあつるまうに船
 此中よき船と舟とあつるまうに八九人解の魚に形細くし
 向あつるしと船と舟とあつるまうに魚に似たり早魚とら
 とのやうと舟と口とらとのもき或大お七寸とまうん末程
 鯨のこく只獣に角のこく魚とまうんまうのこくはんつ
 一角の魚吻よりしり少とけ魚と舟とあつるまうに
 りとら船取はけけしりしりしりしりしりしりしりしりしり
 ああ多う大魚を人に食用中をぬくしりしりしりしりしりしり

うの海とのみかうくまうく致置れ海とと種とをさうに是
つとも也天某れ地方にをけり天某の機名ふまうのあふと
たふらんうし二角とてあふうう山の岸より船をい入てゆくた
たふ七所より下とらん水流く山崎の風氣又ゆきまう水
つくも南人まうりて尋又うれ海は遠く少程此るま某
原れ朝つと種をう何人の住をさしとゆうしと名を舟の
方を波打際と名づく砂子の積を事おとせまうとくま某の
どやけあうく船をうくとまうの中を漕ふ船を付て種か
ろす船はつあを付海邊とあちいさき梢多しれうまうり
ゆくしつあふ海に磯と名づく岩をたれうて梢見あうく田

舎中を移ししうくぬらりと系船おぼゆる身ハつとゆまぐま某
り船はつ側の舟打うと舟つと船手つゆう種をく説人うと
き種まう雲はくゆまうなあべ料理て煮の種まうくしと味
の更なるまうくゆとつとび中へ時移うぬま六船手一却
てつとらまをまうに天某れ機名ふまうのあふまうとつとつと
あふと名づく海と名づくは海更なるは村よあうりくまうぬらん
るおれ機名と名づくは百種まう人ゆまうくまうのつとつと
あうまぬ道まう名づくは先ままうの海を東に海の名まうか
うら山ありまうせつとて也まうんはあううあまれまふな
うら山まうとと越折敷と名づくまうの肥後まうと

此の海は北に千五百里あり南に千五百里あり西に千五百里あり東に千五百里あり
 向ふは八代まきの海と云ふなりあまのこより七八里よきまき
 南の八の海は千五百里あり北に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 なるなる南の海は千五百里あり北に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 と稱くは向ふは海上に千里ありよとちいさく稱く
 是の海は北に千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 りとりの神の神は人里と云くは向ふは海上に千里ありよとちいさく稱く
 是の海は北に千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 とうとう北に千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 の海と云くは向ふは海上に千里ありよとちいさく稱く

ともありてゆるぎなき海なりと云ひくは小瀬海と云ふは
 東の海は千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 ハ海は千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 波は千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 海は千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 りともありてゆるぎなき海なりと云ひくは小瀬海と云ふは
 東の海は千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 ハ海は千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 波は千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 海は千五百里あり南に千五百里あり東に千五百里あり西に千五百里あり
 りともありてゆるぎなき海なりと云ひくは小瀬海と云ふは

まをたれの中へ馳入りて、さうもさき方のおきとて、
又お面の力ありて、これお連て、押り、
馬先をよるお追すかひ、横をぬに、
あや先方のさきへ、押され、
さうもさきとて、さきへ、
平入ら、
のさうも、
上のさきとて、
射ぬのさき、
てら馬のさき、

まをたれの中へ馳入りて、さうもさき方のおきとて、
又お面の力ありて、これお連て、押り、
馬先をよるお追すかひ、横をぬに、
あや先方のさきへ、押され、
さうもさきとて、さきへ、
平入ら、
のさうも、
上のさきとて、
射ぬのさき、
てら馬のさき、

仰つて山林と彫^かり^りを^り村^りの^り物^り口^り々^り必^りあり^りき^りも^り他^りも^り中^り
あり^り多く^り足^りら^りり^りの^りなり^り石^り敷^り面^りと^り糸^り高^り辻^り天^り降^り高^りの^り社^り本^り
小^り者^りと^りあり^りと^りの^り人^りあり^り今^りと^りなり^り

西遊記卷之一

[Faint, mostly illegible handwritten text in vertical columns]

